スペシャルインタビュー

気候変動問題解決にユースの活力を
衡平で持続可能な社会をめざして

Climate Youth Japan　COP23派遣事業統括　**高橋 美佐紀氏**

パリ協定を境に、気候変動交渉の舞台に一つの大きな変化が起きている。サイドイベントとして開催される、地球温暖化対策の具体的な取り組みや行動に焦点が当てられるようになったことだ。そうした主体（アクター）の中で、企業や自治体、市民社会と同時に存在感を高めているのが、学生を中心とした若い世代・ユースの活動である。若者たちが捉えている気候変動問題の本質とは何か。Climate Youth JapanでCOP23派遣事業統括を務めた高橋美佐紀さんを訪ねた。

ユースによって設立された気候変動NGO

――Climate Youth Japanはどのような活動をしている団体なのですか。

高橋　Climate Youth Japan（CYJ）は、世界全体の気温の上昇が2℃以内にとどまるべきであるとの科学的見解を初めて盛り込んだ「コペンハーゲン合意」を採択した翌年（2010年）、気候変動問題に高い関心を持って活動しているユースによって設立されたネットワーク型NGO（任意団体）です。

ユースが気候変動問題を解決へ導くことで、衡平で持続可能な社会を実現することをめざし、学生と社会人を含めて現在約30人が活動しています。COPへの人材派遣をはじめとする気候リーダーの育成、関係省庁への声明文や政策提言などの意見発信、また国内外の環境団体とのネットワーク構築や他国ユースとの連携などを行っています。

COP23でのユースのアクション

サスティナリンピック事業の創設

――昨年は2020年に向けてオリンピック事業を立ち上げられたそうですね。

高橋　はい。学生団体や組織委員会、NGOなどさまざまなオリンピックのステークホルダーたちと協働し、若者が描く未来の社会を発信する機会を創出したいと考えています。分野を超えたネットワークをユースから生み出し、未来へ向けたビジョンを示していくことを目的に、2017年2月「サスティナリンピック事業」を立ち上げました。

例えば新しく学習指導要領に組み込まれた「環境とスポーツ」分野の普及につながるコンテンツの開発、若者への出資を再エネから実現するプロジェクトなど、オリンピックという機会を通して生み出される若者の取り組みを支援し、広く発信する機会を提供していきたいと思っています。

――社会的にインパクトの大

きな事業に対してアプローチしていくことが多いのですか。

高橋　シンボリックな事業では、活動の認知や気候変動への啓発といった直接的なアプローチの効果が見込めます。しかし、注目度の高い事業においてのみ活動するということではありません。CYJのミッションは、さまざまな活動を通じたエンパワーメントです。

影響力のある人物・団体などに対し、中長期目標の重要性や再エネへのエネルギーシフトなどについて政策提言をしたり、COP派遣事業などを通じて気候リーダーとしての歩みを進めることなど、多方面での活動を行っています。メンバーは日常的にはオンラインで情報を共有しています。機会や情報量を増やすことで、気候変動の影響を直接受ける私たち若者たちから、未来の社会へ向けてのメッセージを発しているのです。

社会の意思決定プロセスにユースの存在感を

――COP23に参加されたそうですね。

高橋　CYJはCOP16からユースの派遣を開始しました。私たちの活動の認知や間接的に会議へ貢献できるような取り組みに注力しています。5月の中間会合では、会議で発表されるリポートを英語で読む訓練、研鑽のための合宿も実施しました。派遣組と国内組に分かれ、派遣組から現地での活動報告やアクションの模様などを、国内組はCOPの意義などを伝える情報発信も行っています。SNSには通常の数倍ものアクセスがあり、一定の反響をいただけたと思います。

また、COP派遣事業は、事業を通じたユース一人ひとりのキャリアアップといった目的もあります。私は今後の進路で研究を進めたいと思っているREDD+（途上国の熱帯林の保全の仕組み）に関する会合に参加しました。

――何か手ごたえはありましたか。

高橋　サイドイベントなどで、パリ協定に定める各国の中期目標（NDC）向上につながる提案発表をしたり、地域活性化と温暖化対策を融合させた岡山県西粟倉村の事例報告などの機会を得て、反応やご意見をいただくことができました。しかし、COPでは活動範囲に制限があったり、参加した会議の内容を理解できるだけの知識、発言力を高める訓練の不足なども感じました。また、海外のユースに比べ、企画力や運営能力、またアクションのインパクトが絶対的に足りないことを痛感しました。

――ジャパンユースが抱える課題は、日本が抱える気候変動問題の本質を表しているかもしれません。

高橋　COPでの活動範囲を広げるためには、ユースデリゲーションプログラムなどを使い、クローズドな交渉が行われている会議への参加権を得ることが重要になりますし、政策提言手法を高めるなども必要です。海外ユースの強さは「ユースとしての責任を全うしていること」「ユースの社会を変える力を信じていること」だと感じました。

社会の意思決定プロセスにユースが関わるなど、自国の環境レベルを上げることに寄与していきたいです。活動を共にしていける仲間を増やしていくとともに、活動に賛同していただける団体や企業などとのパイプも太くして協働していければと考えています。

プロフィール
高橋 美佐紀（たかはし みさき）
1995年、群馬県前橋市出身。小学6年生の時に群馬県主催事業「第七次子ども緑の大使」でブラジル北部の「アマゾン群馬の森」を訪問したことがきっかけで環境の道へ。公立鳥取環境大学環境学部環境学科にて森林政策を専攻する傍ら、Climate Youth Japanに参画。他に林業女子会@鳥取代表、第19回日中韓環境大臣会合日本ユース代表、第2回REDD+プラットフォームオフィシャル特派員など。